

目次

総論 関ヶ原合戦の位置づけと課題……………谷口 央 3

第1部 政権の中枢

増田長盛と豊臣の「公儀」——秀吉死後の権力闘争……………石畑匡基 27

軍事力編成からみた毛利氏の関ヶ原……………光成準治 53

上杉景勝の勘気と越後一揆……………片桐昭彦 79

【コラム】佐竹氏と関ヶ原合戦……………森木俊介 109

第2部 政権の周辺

関ヶ原合戦と尾張・美濃……………山本浩樹 121

関ヶ原合戦と長宗我部氏のカタストロフィ……………	津野倫明	141
島津義久〈服属〉の内実―関ヶ原への道程……………	黒嶋 敏	165
【コラム】真田と上杉を結んだ道―戦国・織豊期の沼田と会津……………	竹井英文	191
特論 「関ヶ原合戦図屏風」―作品概要と研究の現状……………	高橋 修	203

執筆者一覧

総論 関ヶ原合戦の位置づけと課題

谷口 央

はじめに

慶長五年（一六〇〇）九月に勃発した、一般に天下分け目の戦いと称される関ヶ原合戦は、その直前に徳川家康を大将とする東軍諸将の間であったとされる、いわゆる下野国小山での評定についての論争〔光成二〇〇九、白峰二〇一二、本多二〇一二〕や、その後の東軍の西上行動の見直し〔下村二〇一二〕など、近年の研究はめざましく深化している。また、勝者である徳川氏および東軍諸将の動向のみならず、西軍諸将についても多くの事実が明らかにされつつある〔光成二〇〇九、白峰二〇一二〕。さらに、今後見込まれる研究計画まで含めると、藤田達生氏による戦場調査法の確立といった課題設定も見られる。こうした研究の深化により、これまでの関ヶ原合戦に対する「定説」は、現在も塗り替えられ続けている。

合戦の勃発理由にしても、直接的な関係についての具体的な実証〔笠谷二〇〇〇など〕はもとより、そこに至る前提としての豊臣政権下での動向、および同政権自体の追究など、豊臣政権を含めた総体的な理解に基づく関ヶ原合戦の新たな歴史像も示されている〔光成二〇〇九、矢部二〇二三〕。関ヶ原合戦は、豊臣秀吉の死後わずか二年あまりで勃発し、

しかも、ここでは豊臣政権の中樞を担っていた者は言うまでもなく、他の諸将の大半も何らかの行動を起こしているのである。本合戦の前提として豊臣政権自体を追究する必要があることは言うまでもないであろう。

そこで、本章では、まず「定説」設定に始まる関ヶ原合戦に対する研究の概略を把握し、続いて関ヶ原合戦を豊臣政権下で起こった合戦として位置づける中での課題と、研究すべき視点を明らかにする。その上で、これらの課題に対する本書としての到達点を示すこととする。

1 関ヶ原合戦の研究概略

本節では、関ヶ原合戦の研究概略と論点を把握することからはじめて、次節での課題設定の前提となすべき共通理解を得ておきたい。

関ヶ原合戦についての専論として、古くは小倉秀貫氏による研究がある「小倉一八九〇」。江戸期以来、本合戦の勃発理由とされてきたのは西軍大将であった石田三成の性格的問題であったが、小倉氏は、このような視角は徳川幕府下で作られたもので真実ではないとしている。また、直接同合戦の勃発へと連なる、慶長五年（一六〇〇）六月にはじまった徳川家康の会津東下から同合戦に至る情勢を検討すると同時に、戦後の情勢についても追究したうえで、同合戦の勝利がすぐに家康の天下となったわけではなかったことを指摘している。ただ、これらは直接、関ヶ原合戦自体について追究しているわけではなく、いわば、その原因および影響についての見解を示したものであった。

これに対し、関ヶ原合戦自体の動向も含め、その前後をあわせて全体を見通す成果として、『日本戦史』関原役「参謀本部一八九三」がある。同書では、合戦の直接的な始点は、三成と連携した上杉景勝と直江兼統の会津での戦争準備

を基本とし、それに対応した家康の東下が関ヶ原合戦へと直接連なるものとする。

その際の西軍の中心的な諸將の動向については、三成を大将とし、景勝・毛利輝元・宇喜多秀家がこれに連動し、家康の留守(東下)を機に挟み撃ちを狙い拳兵したとしている。また前田玄以・増田長盛・長束正家のいわゆる豊臣奉行衆は、当初より西軍に含まれる形で行動していたとの指摘も見られる。つまり、七月十一・十二日から具体的に確認される三成の拳兵行動から、数日後の十七日にこれら奉行衆によつて発給された「内府ちかひの条々」による家康の糾弾までを一貫した行動とする視点である。

他には、結果的に西軍に属した島津義弘は、本来徳川勢が籠もる伏見城に入城予定であったが、その城番であった家康家臣の鳥居元忠に拒絶され、やむなく西軍に参加したとしている。加えて、同じく西軍に属し本戦では家康の背後となる南宮山に布陣した毛利秀元は、その前線を押さえる一族である吉川広家が東軍と密約していたため、それに遮られ、自身の意思に反して参戦できなかつたともしている。

対する東軍諸將の動向については、会津東下時にあつた小山評定での福島正則の振る舞いが豊臣恩顧の他の諸將の動向を決めるも、一方で家康は正則への疑心はぬぐえず、黒田長政等を通じて、その動向を注視していたとしている。また、結果的に、家康の西上が九月一日まで遅れたのはこのことが原因であつたともしている。

先に見た小倉氏の見解と比較すると、たとえば三成の性格に対する認識など、詳細な点で言えば異なる部分は見られる。しかし他の点については、小倉氏が直接関ヶ原合戦自体の動向を検討したわけではないこともあり、重ならぬ指摘も多く、また、関ヶ原合戦を総体的に見ていることもあり、ここでの認識が、これ以降の関ヶ原合戦に対する「定説」になつていくことになる。

では、同書では関ヶ原合戦の勃発理由をどのように認識しているのであろうか。この点を改めて確認しよう。

第一は、三成に対する加藤清正など豊臣恩顧大名の私怨、その詳細は①三成の性格的問題・②豊臣家中内に形成された武断派と吏僚派の反目・③秀吉の二人の妻を基軸として分けられる北政所派と淀殿派の反目の三点であったとしている。

第二には、合戦前年正月にあつた徳川家と伊達・福島・蜂須賀家との私婚問題、つまり、豊臣秀次事件直後の文禄四年（二五九五）八月三日に発布されていた御掟に対する違反と、その後に特に顕在化することとなった、前田利家を推す在坂諸将と徳川家康を推す伏見諸将の二分化という、秀吉後継体制である家康・利家の二頭体制の限界が挙げられている。ここまで見てきた二点に見るように、『日本戦史』に示される本合戦の勃発理由は、ともに秀吉の死後に政権内部に亀裂があり、それが関ヶ原合戦を生み出したとするものである。

続いて、同じく戦前に発表された関ヶ原合戦を総体的に検討する研究として、『近世日本国民史』関原役「徳富一九二三」が挙がる。同書では、たとえば、七月十二日段階に、豊臣奉行衆の一人で西軍に属した増田長盛は、当初は三成と共闘していなかつた可能性を指摘（永井右近大夫直勝宛書状より）するなど、『日本戦史』と比べ、一部事実認識が異なる箇所も見られる。しかしおおよそに違いはなく、いわば同書の内容も『日本戦史』で示された内容と大きく異なるものではない。

ただし、その原因については、『日本戦史』に比べ考察は多く、直接的なものだけでなく、その背景にまで及んでいるのが特徴となる。つまり、朝鮮出兵や打ち続く土木工事により、民衆は休まることなく、秀吉の死は、いわば天下人心の休息であつたとする点などである。このような指摘は、『日本戦史』が指摘する政権内部での亀裂のみならず、被支配者に対しても豊臣政権自体が不完全であつたことがその背景にあるとするもので、新たな関ヶ原合戦の勃発理由の提示といえる。

なお『近世日本国民史』では、秀吉後継体制について、基本的に秀吉生前はワンマン体制であったが、秀次事件直後に発布された御掟・御掟追加の発布により五大老が明文化され、なかでも秀吉の死後は、家康・利家の二人が財政を担うなど、主たる立場として置かれることになったとしている。一方、関ヶ原合戦の直接的な原因については、特に朝鮮出兵時に手が付けられない状態となった北政所派と淀君派の確執を主たる理由とするなど、『日本戦史』同様に政権内部での亀裂に求めている。

以上が戦前の関ヶ原合戦の研究である。本合戦の推移については、いわゆる「定説」が戦前の段階で設定され、また合戦勃発の原因として政権内部の亀裂という秀吉の後継体制の限界と、その背景として豊臣政権自体の不完全性による避けられない衝突であったとする点に求められていることを特徴としている。

戦後になり、松好貞夫氏は、関ヶ原合戦に駆り出された民衆の実態や刈田など、合戦時の戦闘以外の影響、また関白豊臣秀次と大名との関係が与えた関ヶ原合戦への影響を追究するなど、本合戦の周辺と背景理解をはかっている。このような視点での研究は、これまでは先述の小倉氏が触れている程度で、それ以降ほとんど注目されてこなかった内容であり、新たな視点の提供といえる。また、その内容も、これまでの研究と比べ、先述の秀次事件の関ヶ原合戦への影響を追究するなど、異なる理解も示される。しかし、本合戦自体については、戦前の他の研究での指摘と大きく異なるわけではない〔松好一九六四〕。

二木謙一氏によっても関ヶ原合戦の総体的理解が見られるが〔二木一九八二〕、これもいわゆる「定説」と大きく異なるものではない。ただ、強いて異なる点を挙げるとすれば、二木氏は戦後の大名配置にも触れており、そこでは外様大名を遠隔地に置き、徳川陣営の防衛体制強化を図ったとされる点が強く示されているように思われる。

これに対し、関ヶ原合戦自体の全面的な見直しを進め、その後の国家体制への影響まで含めて研究されたのが笠谷